

## 『絵本平泉実記』の典拠

作品の典拠を探すことの意味は、第一にはその典拠との差から作品分析をするためであろう。それは確かに文学研究の一つの方法であるが、作者中心の考え方と言えるかもしれない。すなわち、作品は、典拠などを使用し構成した作者の功績によって生まれるもの、という見方からきている。しかし、その一方で、作者は作品が生み出されるための一部品に過ぎないという見方も存在しないだろうか。特に、商業出版が栄え、また写本の商業的流通が盛んに行われた近世という時代の文学を考える上では、有効な視点かとも思える。例えば草双紙の場合、作者が中心になって画師に指示を出しながら作品を作っていくことももちろんあるが、書肆が当時の流行を考えながら作者や画師に指示を出して生まれる作品もある。また、絵本ものの読本の場合、作者として記されている名はあっても、その実は実録、通俗軍書など既成作品からの丸取りということもある。こういった作品においては、作者中心の作品評価という方法が

取れないのである。

その視点から典拠探しをすることは、作者の功績を考えるのではなく、文学史を考えるという面に繋がってくる。一つの作品が生み出されるために、どのような先行作品があり、文化背景があり、その上で作者（あるいは書肆、画師なども含めて）がどのように仕事をしたか、を考えることになろう。

近世文学史を考える上でこれまでに見過ごされている部分の一つとして、実録や通俗軍書など、貸本屋等で流通した写本群がある。以前拙稿で、通俗軍書の一つ『鎌倉見聞志』に着目し、この作品が日記体偽書の写本『扶桑見聞私記』や馬場信意作の通俗軍書刊本『武徳鎌倉旧記』『鎌倉繁栄広記』から作られ、また、この作品が読本や草双紙の典拠となっていたことを考察した<sup>1)</sup>。本稿では、絵本もの読本『絵本平泉実記』の典拠として、『鎌倉見聞志』とも関係が深いと考えられる通俗軍書写本『奥州征伐記』（『東

藤 沢

毅

実記』の一部)を指摘し、通俗軍書から読本への流れを確認し、また通俗軍書写本の文学史的位置を検証したい。

## 一 『東実記』『奥州征伐記』について

最初に『東実記』と『奥州征伐記』という作品について解説しよう。

現在までに所在が確認できたものは以下の通りである。

### ■『東実記』

①宮内庁書陵部所蔵本(『東実記大全』)

初編三十卷十冊、二編三十卷十冊、三編三十卷十冊、四編二十卷十冊。

②函館市立図書館所蔵本(『東実記』<sup>2</sup>) 国文学研究資料館マイクロフィルムによる)

前編存二十二卷(巻五・十八〜二十四欠)  
後編存二十四卷(巻一・二・五・九・十・十四欠)

③群馬大学附属図書館所蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルムによる)

初編存一卷(存巻二)

④架蔵本

初編三十卷十五冊。

### ■『奥州征伐記』

⑤斎藤報恩会所蔵本(国文学研究資料館紙焼写真本による)

二十五卷十冊。

⑥静岡大学附属図書館所蔵本(原家旧蔵本)《未見》

目録によれば二十五卷五冊。嘉永四年写。

⑦架蔵本

十卷十冊。文政十年写。

『東実記』で内容的に揃っているものは①の書陵部本である。この内容は、元暦元年(一一八四)頼朝挙兵から源平の争い、平家滅亡、奥州平泉征伐と描かれ、最後に曾我兄弟の譚の発端に景清の譚がある、というものである。つまり、『鎌倉見聞志』に連続する直前の世界を描いている作品なのである。①は初編から四編までの形を取るが、各編の切れ目に一貫性がなく、編毎のまとまりは悪い。初編の序文を欠くことや、現存の状態から見て、書写年次は比較的新しいものと考えられる。

②の函館本、③の群大本には序文がある。序者の署名はないが、そこには「大江広元見聞集、今川了俊武盛録にもとづき実録を挙て枝葉を捨て」て執筆されたことが記される。『今川了俊武盛録』の方はどのようなものか未だ確定できないが、『大江広元見聞集』は、『鎌倉見聞志』にも使用された『大江広元日記』すなわち『扶桑見聞私記』のことを指すのであろう。とすれば、『東実記』の作者が、『鎌倉見聞志』作者と同じ龍見軒<sup>3</sup>である可能性も高い。

②の前編卷三十奥付には「東実記後編 三十冊／鎌倉見聞志 廿五冊／同 後 廿五冊／同 和田軍記也 廿五冊」と書かれている。「東実記」「鎌倉見聞志」「英雄義秀伝」が連続する姉妹編であることを示した広告書きであろう。初編卷一のみの③には、惣目録（初編のみのもの）の後に「初編 三拾冊／後編 貳拾五冊／残編 拾冊」とある。②と③を照らし合わせ推定するに、②の前編は③の初編に相当し、また②の後編卷一〜二十四中が③の後編に、②の後編卷二十四中〜三十が③の残編に相当すると思われる。「東実記」の中から平泉征伐の譚が独立したものが『奥州征伐記』である。⑥の静大本は未見だが、④の斎藤報恩会本と⑤の架蔵本は巻数こそ違え内容は同じものである。「東実記」各本と比較するに、①の二編卷二十七から四編卷九まで、②の後編卷一から卷二十四途中まで、③の後編全て、に相当する。現在までの資料から推定するに、まず『東実記』が②のような形で成り、内容上後編が③のように奥州征伐部分と残編とに分かれる形となり、その後奥州征伐部分が独立したのではないだろうか。

## 二 『絵本平泉実記』と

### 『平泉実記』『奥州征伐記』

『絵本平泉実記』は前編文政四年刊、後編同五年刊のいわゆる「絵本もの読本」である。作者・画師はこのジャン

ルの代表的存在とも言える速水春暁斎。角書に「鎌倉外伝」との記述を持つ。

絵本もの読本は、その典拠の多くを実録や通俗軍書から取っている。昭和二十八年に刊行された『福島県史料集成』第五輯には『絵本平泉実記』の粉本が『平泉実記』<sup>4</sup>であることを指摘し、横山邦治氏も『読本の研究』<sup>5</sup>の中で同見解を示している。『平泉実記』は大本五巻、相原友直作の宝曆三年刊本。その序文には「東鑑者、実録也、可以鑑焉、可以証焉、近世坊中、所梓布之楚史、虚実混淆者、為彼書不能採其醜也、豈不爽快乎」「不如読東鑑」とあるように『東鑑』を規範として事実を記すことを目指したものである。本文中には、その他『源平盛衰記』『義経記』『平治物語』などを参照したことが記される。またその一方、「或説曰」「近代出ル所ノ諸書」の説を挙げ、「按スルニ」の形で否定しているが、友直の執筆した『平泉雑記』に載る『鎌倉実記』『義経勲功記』などを指しての評であろう。確かに『絵本平泉実記』は『平泉実記』を典拠として使っている。それは例えば、『平泉実記』巻頭に挙げられた奥州藤原家の系図（図1）が、『絵本平泉実記』でもそのまま取り入れられている（図2）ことから容易に納得できる。本文にも、明らかな引用箇所や類似箇所が多く存在する。また、次のように、友直の私見がそのまま転用されることもある。

<p>藤成 從一位下 伊勢守</p> <p>村雄 從五位下 下野大掾河内守</p> <p>秀卿 從四位下 武藏守 鎮守府將軍 世人子 藤原大</p> <p>于時 從五位下 相模守 鎮守府將軍</p> <p>于清 從五位下 下野守</p> <p>賴遠 從五位下 巨理權大夫</p> <p>清衡 鎮守府將軍 住奥和節</p> <p>家清 小館</p> <p>基衡 平泉 陸奥出羽押領使 鎮守府將軍</p> <p>清綱 泉十郎</p> <p>俊衡 樋爪本舟入道</p> <p>季衡 樋爪五郎 住遠在司妻 繼信忠信之母</p> <p>女 繼信忠信之母</p> <p>師衡 本田冠者</p> <p>義衡 樋爪次郎</p> <p>忠衡 樋爪冠者</p> <p>秀衡 從五位上 鎮守府將軍 陸奥守 出羽押領使</p> <p>國衡 西城戸太尉</p>	<p>泰衡 泉冠者</p> <p>忠衡 泉三郎</p> <p>高衡 本吉冠者</p> <p>通衡 出羽押領使</p>
---	--

図1 『平泉実記』(刈谷市立中央図書館(村上文庫)所蔵本)

「(文治三年四月十五日鎌倉勢が奥州征伐に出向き、義経・秀衡連合軍に破れ引き返した、という説に対して) 按二如此三十六万騎ノ大軍ヲ発スル事小事ニ非ズ。何ゾ是ヲ東鑑ニ漏シテ載セザルヤ。且ツ一戦ニ利アラザルニ依テ大軍ヲ空ク引退ク事、頼朝豈如此軽率ノ軍法ヲナサンヤ。其誕妄ナル事論ズルニ不足(『平泉実記』卷一・源義経最期 並秀衡病死 附義経履歴)」

「按ずるに頼朝卿三十六万騎の大軍を發すること小事にあらず。何ぞ東鑑これを漏して載ざるや。且一戦に利あらざるに依て、大軍を空く引退く事、鎌倉殿豈かくのごとき軽率の軍法をなし給んや。妄誕なる事知べし(『繪本平泉実記』卷二・鎌倉殿秀衡入道之動靜を採聞る事)」

<p>藤成 從四位下 伊勢守</p> <p>村雄 從五位上 下野權守</p> <p>秀卿 從四位下 鎮守府將軍</p> <p>于時 從五位下 鎮守府將軍</p> <p>于清 從五位下 鎮守府將軍</p> <p>賴遠 從五位上 鎮守府將軍</p> <p>清衡 鎮守府將軍 住奥和節</p> <p>家清 小館</p> <p>基衡 鎮守府將軍 鎮守府將軍</p> <p>清綱 泉十郎</p> <p>俊衡 樋爪本舟入道</p> <p>季衡 樋爪五郎 住遠在司妻 繼信忠信之母</p> <p>女 繼信忠信之母</p> <p>師衡 本田冠者</p> <p>義衡 樋爪次郎</p> <p>忠衡 樋爪冠者</p> <p>秀衡 從五位上 鎮守府將軍</p> <p>國衡 西城戸太尉</p> <p>泰衡 泉冠者 鎮守府將軍</p> <p>忠衡 泉三郎</p> <p>高衡 本吉冠者</p> <p>通衡 出羽押領使</p>	<p>豐澤 從五位上 下野權守</p> <p>于清 鎮守府將軍</p> <p>賴遠 從五位下 巨理權大夫</p>
--	--

図2 『繪本平泉実記』(架蔵本)

しかし、『繪本平泉実記』は『平泉実記』だけで成り立っているわけではない。『平泉実記』は五巻本だが、その内、義経の事蹟や、また源頼義・義家、坂上田村麻呂の賊徒征伐譚などにも紙面を割いているため、実際の平泉征伐譚は正味三巻分くらいである。半紙本とはいえず、『繪本平泉実記』の十二巻には分量的にも相当しない。前述のように『平泉実記』は俗説を排する方向で執筆されていくが、『繪本平泉実記』は俗説を大事にして、読者の気を引くような筋に仕立てている。要するに『繪本平泉実記』は、一つの作品を元に「繪本化」した読本ではなく、複数の典拠のもとに作られたものである。

その典拠の一つには『奥州征伐記』（正確には「東実記」の中の『奥州征伐記』部分）と記すべきだが、便宜上『奥州征伐記』とする）があるかと思われる。表1に示したとおり、その影響は『平泉実記』と比べても少なくない。むしろ、人物の性格などは『奥州征伐記』のものを借りている。

『奥州征伐記』と『繪本平泉実記』の関係を確認してみよう。『奥州征伐記』は義経に対してかなり批判的である。頼朝との不和の原因を

「君には鎌倉殿と御中不和に成らせ玉ふ其根元は西国にて女院を犯し給ふと今の御台所を迎ひ給ふ……

（巻二・義頭卿名取川菊御見物の事 并 泉三郎忠衡養女の事）」

としており、これは『繪本平泉実記』に、

「義経、建礼門院の御舟に参り、又平大納言時忠卿の女に通じ、鎌倉に伺はずして、五位尉に補任ある事、頼朝卿深く憤り、……（巻一・義経戦功の事）」

「判官殿功に誇り朝廷を蔑にし、勿体なくも建礼門院を驚かし奉る条、其罪最甚し（巻三・平泉一門評議の事）」のように、若干描写はほかしながらも継承される。なお、『奥州征伐記』の義経は、平泉に来てからも女癖の悪いのは改まらず、泉三郎忠衡の妻をも強姦してしまうという、とんでもない人物として描かれているが、さすがに『繪本平泉実記』ではそれは取らず、しかし、その妹浪の戸と強引に関係を結んでしまうという形に変えている。

戦の一場面でも、事件そのもののみならず、表現までも似通う箇所がある。次に挙げたものは、奥州側の樋爪五郎高衡が、鎌倉勢の掲げる院宣の写しを射落とした時の鎌倉方の反応である。

「二品は彼矢を取り寄せ見玉ふに、角筈に鷲の羽を以矧たる矢にて十三束三ツ伏せ、奥州の住人樋爪五郎高衡と記したり。二品の仰せに是偏に我叔父八郎為朝の矢に等し。此矢に当らば何者にても落命すべしと仰せける（『奥州征伐記』巻三・鎌倉殿安津加志に本陣を居へ合戦の事）」

「鎌倉勢これを見てあな怖の弓勢や。何者か此矢先に

かゝつて命を陥すらんと、眉を顰て見へければ、頼朝卿其矢を取て見給ふに角筈に鷹羽矧たる矢、十五束三ぶせに、雁股は残し、奥州住人本吉冠者高衡と彫付たり。鎌倉殿見給ひ、此矢は我叔父鎮西八郎為朝ならでは射べき者もなしと覚へるに、高衡社奇代の者よ……

〔繪本平泉実記〕卷八・本吉高衡梶原景季弓勢之事

『奥州征伐記』の特徴は、この高衡を英雄に作りあげたところにある。全体の構成は、鎌倉側の和田義盛と奥州側の樋爪五郎高衡（他の文献資料では元吉冠者高衡）という両陣営それぞれの英雄が、いろいろと駆引きを行いながら戦う、という形を取っている。和田一族を善の側の中心として設定するのは、『東実記』から『鎌倉見聞志』『英雄義秀伝』の中において徹底されているのだが、ここでは対置するもう一人の英雄を設定したことが評価できる箇所である。この二人の前では、義経はもとより、頼朝までがやりこめられてしまう小人物に過ぎない。実際のところ、『東実記』前半部分では源平の争いを中心となり、ある程度までは読者の頭の中にある史実を踏まえねばならないという通俗軍書の性格ゆえ、どうしても義盛の姿はぼやけてしまっている。また、そこではまだ歴史に対する評釈といった一面が目立っていてもいる。それらが払拭されてくるのが『東実記』の後半部分、すなわち『奥州征伐記』の部分である。和田義盛と樋爪五郎高衡という、二極化された英雄の対決とい

う構成は、読者にとって物語の世界に入り込みやすく、楽しめる作品となっている。

表1でわかるように、『繪本平泉実記』は、奥州征伐という事件の輪郭を『平泉実記』の方から借りている。しかし、戦の中身は『奥州征伐記』からの脱化が多い。これは、英雄としての高衡の姿を継承してきたことを示している。だが、残念ながら『繪本平泉実記』は成功しているとは言えない。『奥州征伐記』ほど、二極化の構成が徹底していないため、少々散漫な印象を受けてしまう。娯楽小説としては『奥州征伐記』の方が、はるかに優れた作品だと言えるよう。

### 三 おわりに

『繪本平泉実記』の刊記に挙がる書肆は次のとおりである。

「京都書林 吉野屋仁兵衛

大坂書林 河内屋太助

河内屋長兵衛

河内屋茂兵衛

この内、河内屋太助は、『鎌倉見聞志』からの影響作『繪本鎌倉新話』や『星月夜頭晦録』の出版に関わる書肆。また、河内屋長兵衛は同様に『繪本和田軍記』の出版に関わっている。河内屋太助が『星月夜頭晦録』に関わるのは

【表1】

平は『平泉実記』、奥は『奥州征伐記』を表す。

●は明らかな影響関係が見出せる箇所、○は類似箇所、▲は部分的な影響箇所。

平奥 『絵本平泉実記』

卷一

○ 陸奥国国府鎮守府之事

● 藤原秀衡家系の事

○ 源義経奥州下向の事

● 源義経戦功之事

● 義経潜行之事

○ 義経危難を経て再び奥州へ下向の事

卷二

▲ 義経高館城住居の事

○ 判官殿佐藤兄弟が子に対面之事

○ 秀衡入道鎌倉の使者に応対の事

● 鎌倉殿秀衡の動静を探り聞る事

● 秀衡入道重病外国の医を避る事

● 由利八郎鎌倉に使用する事

卷三

○ 秀衡入道謀を残す事

○ 松田六郎西城戸国衡を説く事

● 平泉一門評議の事

○ 判官殿衣川合戦の事

○ 西城戸太郎刺客を用て義経を討と謀る事

卷四

● 安津美藤九郎鎌倉江奔る事

● 平泉鎌倉請文の事

● 平泉館軍儀の事

○ 衣川合戦の事

○ 杉目行信大将に代る事

卷五

○ 義経自殺の事

○ 衣川合戦勇士等戦死の事

○ 衣川落城の事

○ 義経島渡りの説

○ 義経の首鎌倉に送る事

○ 泉屋城合戦の事

● 泉三郎忠衡血戦の事

卷六

○ 泉屋城陥落忠衡自殺の事

○ 鎌倉の諸将奥州征伐の得失を論ずる事

● 北条時政政子前に囑て東奥征伐を勧る事

▲ 鎌倉勢奥州発向の事

● 奥州方陣備の事

● 鎌倉殿宇都の宮着陣の事

卷七

○ 白川表合戦の事

○ 金剛別当が謀略先陣の勢を破る事

● 鎌倉殿御旅館の事

○ 杉目岩陥落の事

○ 石那坂合戦の事

佐藤繼信忠信が妻女石那坂合戦の事  
瀬上の砦陥落の事

卷八

○ 荒神坂合戦の事

万努の謀仙北太郎三浦工藤と機関事

長野柏原荒神坂を爭取事

国見峠合戦の事

金剛別当勇戦の事

厚賀志砦陥落の事

● 本吉高衡梶原景季弓勢の事

▲ 大城戸合戦の事

卷九

畠山和田機に臨で大城戸に叩戦ふ事

大城戸勢再度夜討の事

高畠父の讐を報ずる事

奈女形砦合戦の事

宇田砦陥落の事

大河が謀略千葉八田を破る事

● 北陸道寄手合戦事

● 高衡兵を伏て寄手を討事

● 高衡謀略兵糧を焼事

○ 三浦葛西川村大友拔懸の事

卷十

○ 大城戸落城之事

○ 西城戸国衡金剛別当討死の事

○ 畠山和田国衡が首を論ずる事

● 高衡大城戸落城に驚く事  
○ 高衡単騎鎌倉殿を追ふ事

村翁鎌倉殿を匿ふ事

中田城合戦の事

○ 広瀬川合戦吉岡小五郎討死の事

卷十一

京女鵬城合戦乃事

伊達郡平定之事

根無藤城合戦の事

岡太郎左エ門夫婦討死の事

高婆之栗原落城の事

平泉初度合戦の事

▲ 鎌倉殿御陣廻り九人高衡勇戦の事

本宮九郎反忠大手曲輪焼討の事

卷十二

○ 北条時政拔懸の事

泰衡比内贄の城に移る事

○ 由利八郎生捕るゝ事

○ 本吉高衡血戦の事

○ 平泉城陥落の事

○ 城四郎鎌倉殿を恨事

○ 川田乙部反心泰衡を弑する事

○ 厨川大高雀形碇が関落去の事

● 鎌倉殿御凱陣の事

文政四年刊の三編から、また『絵本和田軍記』は文政五年に稿が成っている。『絵本平泉実記』の刊行が前編文政四年、後編同五年であることから考えても、鎌倉ものの読本作成<sup>9</sup>という意味で、この二人の書肆の意向が強く表れていることがわかる。なお、河内屋長兵衛は文政年間、『平泉実記』の版權を持つている書肆でもあった。

『東実記』（奥州征伐記）を含めて）や『鎌倉見聞志』は、それ以前に成立した刊本や写本をもとに作られた。そして、書肆の意図の下、読本や草双紙<sup>10</sup>の粉本となっていた。こうした通俗軍書写本は内容的にかなり娯楽性が強く、ある意味ではかえって近世文学らしい文学であるとも言える。その娯楽性ゆえ、また写本であることも加味されてか、これまであまり研究対象となっていないが、文学史的には非常に重要な位置にあることは間違いない。

- (1) 『鎌倉見聞志』成立まで（『江戸文学』14、平成7・5）  
『鎌倉見聞志』から読本へ（『読本研究』第九輯、平成7・10）  
「草双紙の中の和田合戦と朝比奈」（『国文学研究資料館紀要』22、平成8・3）
- (2) 函館本のみ「あづまじつき」と振仮名が振られる。他本は「とうじつき」。
- (3) 「立耳軒」とも。なお、この人物についての考察は別稿を用意している。

(4) 『平泉町史 史料編二』（平泉町史編纂委員会編。平成5、平泉町発行、続群書類従完成会発売）に翻字が載る。

(5) 昭和49、風間書房。

(6) 他に『源氏一統志』などが考えられる。

(7) 『東実記』初編巻頭からこの記述が見られ、一貫している。

(8) 龍児軒（当時は「立耳軒」）による作品『石山軍鑑』では、本願寺側の軍師鈴木重幸と信長側の智臣秀吉という二人の英雄の対決という設定がなされている。『奥州征伐記』ひいては『東実記』の作者が龍児軒である可能性をより高めるのではなからうか。後小路薫氏「唱導から芸能へ——石山合戦譚の変遷——」（『国語と国文学』昭和60・11）参照。

(9) 『巡島記』を巡る鎌倉もの読本の諸相（『文学研究』80、平成6・11）

(10) 『東実記』を粉本とする草双紙に天保十二年刊の合巻『智勇兼備志』（美図垣笑顔作、一勇斎国芳画、蔦屋吉蔵板元）がある。

（補記）本稿は平成九年度近世文学会春季大会（秋田経済法科大学）においての口頭発表に基づくものである。資料の閲覧等、お世話になった関係各機関に厚くお礼申し上げます。